

「半径二〇キロ圏内じゃないから、ここは大丈夫よ」愛川町住民課窓口の通訳、遠藤由美子さんがポルトガル語で伝えている。相手は、日系ブラジル人の女性。原発事故関連の情報が知りたくて窓口に来てきたのだ。テレビで流れる日本語も英語も十分理解できぬ彼女にとってさぞかし不安であったろう。ほっとした表情で、役場をあとにする女性に視線をやりながら、三月二日以降、この種の問い合わせが急増しているのだと遠藤さんが教えてくれた。

愛川町は神奈川県中央北部に位置し、山と川にかこまれた自然豊かな町である。人口約四万三〇〇〇人のうち、六パーセントにあたる二六〇〇人が外国籍住民だ。県内で二番目に多い綾瀬市が四パーセントに満たないからいかに愛川町が突出しているかがわかる。出身地をみても、ブラジル、ペルーについて、ドミニカ共和国、中国、フィリピン、タイ、カンボジア、ラオスと国籍は多彩だ。外国籍住民が多い理由は、町の南部から厚木市にかけてひろがる内陸工業団地にある。自動車メーカーの下請企業をはじめ製造業関連の工場がひしめき、日系人を中心に外国籍住民のほとんどがここで働いている。町を歩いていると、ブラジルやタイ料理のレストランや食材店が目につく。コンビニの駐車場では夕方になるとスペイン語で雑談しているラテン系の若者にでくわす。外国籍住民が、この町の日常風景にとけこんでいるというのがはじめて愛川町をおとすれたときの印象であった。

一九九〇年に入管法が改正され、日系人に対する

て勤労祭の企画にかかわった志村修さんが当時をふりかえる。国際交流クラブというボランティア団体を通じて外国人にも呼びかけ、屋台を出してもらったことにした。やがて勤労祭は口コミで広まり、群馬県大泉町からもたくさんのブラジル人がやってきた。かくして勤労祭は、「町民と外国籍住民との真の交流をめざす」愛川町の理念を体現するイベントへと生まれかわり今も続いている。

日常的に外国籍住民と接していると戸惑うこともある。「日本人の感覚と違って、時間にルーズだったり、夜遅くまで騒いだり」志村さんの正直な感想だ。しかし、「けっこう協力的で、人なつこくて陽気」なところを発見し好感をもてたのは勤労祭で一緒に働けたからだと思っている。「NGOなどが外国文化の紹介を企画してもなかなか協力してもらえないという話を聞くと、もうすこしそういうのがあってもいいのかなとは思いますが」理念より実践が生んだ貴重な経験である。

外国籍住民とともに

現在、住民課の外国籍住民相談窓口にはふたりの通訳がいる。ペルー人の遠藤さんは、一九九五年に日系人の夫と来日し、六年前からこの仕事をしている。もう一人の岩根さんは、日系ブラジル人で、通訳も一九九六年からのベテランである。

火曜日をのぞく平日の午後が二人の勤務時間だ。通訳とはいえ、業務はそれにとどまらない。役場を訪れる外国籍住民に対して「日本の法律やシステムをまず理解してもらい、そのあとで、税金、外国人登録、健康保険など担当窓口につれて

多文化を  
ささえる  
人びと

# 愛川町役場の20年 実践のなかでみつけたもの

神奈川県愛川町は工業団地を背景とした、いわば外国人集住地域のひとつである。外国人との接触は日常的で、彼らの存在は町の風景の一部となった。このような町もいまや特殊なものではなくなりつつある。外国人も住民として受け入れはじめた愛川町の取り組みを、役所をとおして見てみた

くぼた さとる  
**窪田 暁**  
総合研究大学院大学博士後期課程

就労制限が緩和されるとブラジルやペルーから多くの日系人が来日した。しかし、「急に二〇〇〇人の外国人が押しよせたわけではなく、じわじわ増えて、あれっ最近多くなってる？」ってな感じでした」と行政推進課の阿部昌弘さんが回想する。「彼らとは中学のときから日常で接していたので特別な感情はないですね」と語るのは、この町で育った企画政策課の春口孝之さん。九〇年からの三年間を地元の公立中学校で過ごし、それがあたりまえのことだと感じていた。入管法改正から二〇年。外国籍住民が多く暮らす自治体は彼らとどのように向きあってきたのだろうか。

勤労祭で国際交流

愛川町役場には外国籍住民のみを担当する部署は存在しない。外国籍住民には、通訳をとおして日本人と同じサービスを提供するのが基本方針である。それでも家庭ゴミの収集を担当する環境課は、外国籍住民のゴミの出しかたについて、六カ国語で「ごみの分別ガイド」を作成したり、騒音への苦情がくれば、自治会を通じて張り紙をしてみらうなど、各担当課が必要に応じて外国籍住民とかかわってきた。一方で、外国籍住民が多く暮らす環境を積極的に町の施策に活かしていこうという試みもなされている。

毎年、盆踊りの時期になると勤労祭というイベントがひらかれる。一九九七年、会場が工業団地内に向つたのを機に、内容もリニューアルすることになった。「そこで盆踊りにかわるものとして思いついたのがサンバでした」商工課の職員としていく」とのこと。「なぜ、病院にかかったことがないのに保険料を納めないといけないのか」「どうして、なんでも文書で送られてくるの」「自分たちの経験からいっても、日本の文化や習慣はわからないことばかりだった。遠藤さんは、日本人と外国籍住民が互いに無関心のまま生活するのではなく、隣人として理解しあう個人の努力が不可欠だと考えている。

最後の相談にやってきたのは、日系ドミニカ人の女性。夫あてに人間ドックの案内が届いたが日本語でよくわからないとのこと。彼女も日本のシステムにはまだなれないのだとこぼす。遠藤さんにスペイン語で町からの補助などについて説明されようやく納得したようだ。「自分でよく考えるのよ。健康には気をつけてね」この日の遠藤さんの仕事が終わった。

外国人を住民として受け入れるためさまざまな制度や法律は確かに欠かせない。しかし目立たずとも、一人ひとりを大切に努力と気配りが何にもまさると感じさせられた一日であった。

勤労祭に外国籍住民が出店した屋台



勤労祭のサンパショー



ブラジル料理の食材店



相談窓口に来てきた日系ドミニカ人の女性と遠藤さん